

古墳と東アジア

都出比呂志

1. 古墳時代の王権

弥生時代は基本的には平等な社会であった。とはいえ弥生時代も中期になると、住民の指導者は一般住民の居住地である環濠集落を出て、自分達一族だけで館を構え、墓を築くにも共同墓地を離れ、自分達一族だけの豪華な副葬品の入った立派な墓を営むようになる。

しかし弥生時代の指導者は中央政府を持たず独立していた。それゆえ、指導者は中央政府の下部組織として支配される事はなかった。そういう意味で弥生時代の指導者は住民の意思を代表しており、支配者ではなくリーダーであった。リーダーに率いられた地域権力はその内部に、共通する戦闘器、共通の祭器、共通の墓形を持つので、北部九州、出雲、瀬戸内東部、畿内、東海といった地域権力の存在が明らかになっている。

2世紀末～3世紀初め、リーダー達は勢力拡大で争ったが決着がつかず、邪馬台国の卑弥呼を王に擁立して争いを収めた。この争いの経過と決着は中国の歴史書「三国志」の中の魏志倭人伝に記述されている。

こうして日本で初めての中央権力が生まれた。卑弥呼の持つ王権は勝ち取った王権ではなく、地方有力首長達に擁立されて生まれた王権であった。この王権の性格が古墳時代の社会に大きな影響を与えた。卑弥呼の王権が共立という形をとったため、古墳時代の中央権力は十分な権力を掌握できていなかった。そのため中央政権の中でしばしば権力移動が生じたとは私と考えている。この権力移動が古墳の動きから読み取れる。

2. 首長系譜の移動

有力首長は一般に同じ一族で代々受継がれるので、墓は同じ場所に連なって築かれる事が多い。そのため前方後円墳などの首長の墓は一基単独であることは珍しく、普通二～三基の墓が同じ場所に築かれる。これを私たちは首長系譜と呼んでいる。墓が同じ場所で連綿と続く限り、そこを根拠地とする首長一族は政治的に安泰であったと考えてよい。

ところが、それまである系譜が前方後円墳を代々築いていたのに、古墳を築造しなくなったり、円墳しか造らなくなったりする。と同時に、このような変化のあった系譜のすぐ近隣の、別の系譜の首長一族が大きな前方後円墳を築造するという変動が起こる。これはこ

の地域を治める首長が交代したことを示す。この交代を一地域内の首長の輪番制とする意見もあるが、この変動は一地域のみでの独立した動きではなく、列島規模で一斉に起きていること、中央政府の巨大前方後円墳が移動する時期と重なっていることを見逃すことはできない。

特に巨大な前方後円墳を盟主墳と呼んでいるが、私が永い間調査した京都府乙訓郡内では、盟主墳は4世紀代には向日地域の向日系譜から、4世紀末には檜原系譜に移動し、5世紀前半には長岡系譜に、そして5世紀後半には山田系譜に、さらに6世紀前半には再び向日系譜にもどり、6世紀後半には長岡系譜に移動している^(注1・2)。

この変動を全国的な視野で見ると、変動の時期が全国的に重なる場合のあることがわかる。全国的な変動の一回目は4世紀末から5世紀前半、二回目は5世紀後半、そして三回目は6世紀前半である。

まず4世紀末～5世紀初頭に盟主墳が断絶した第一の変動を見よう。

岡山県の盟主墳は、3世紀半ばから4世紀末まで浦間茶臼山古墳から金蔵山古墳へと東部の備前地域でたどれる。しかし5世紀になると盟主墳は備中地域に移動して造山古墳や作山古墳が築かれる。香川県の石清尾山古墳群の首長系譜、播磨の揖保川流域の首長系譜、神戸市域の首長系譜なども4世紀末で姿を消し、他地域に新たな盟主墳が作られる。また東日本では山梨県中道地域の系譜、福島県の会津盆地の系譜が同じ動向を示す。群馬県の毛野でも盟主墳系譜は4世紀の毛野中部の前橋天神山古墳から、5世紀には毛野東部の太田天神山古墳に移動している。

このように、第一の変動は、4世紀末から5世紀初めに全国各地で起こっている。そして同じ時期に、奈良盆地東南部の中央政権の巨大前方後円墳の立地も同様に移動している。このように見ると、地方権力に支えられた奈良盆地東南部の中央権力は、やはり地方権力に支えられた河内の権力に取って代わられたのだと考えることができる。

次に5世紀後半の第二の変動を見よう。5世紀に新たに大王の巨大前方後円墳が造営される地域は、伝応神陵(誉田御廟山古墳)のある河内の古市古墳群と伝仁徳陵(大仙陵古墳)のある和泉の百舌鳥古墳群だが、いずれも5世紀の末にはその系譜が途絶える。

鹿児島の大隅半島では5世紀に唐仁古墳や塚崎古墳が築かれたが、この系譜はそれ以前の4世紀には大きな前方後円墳がなく、5世紀になって突如盟主墳の造営が始まり、その後6世紀には盟主墳は途絶えた。宮崎県の西都原古墳群は4世紀代から小規模な前方後円墳はあったが、5世紀前半になって女狭穂塚古墳や男狭穂塚古墳のような盟主墳が出現する。しかし盟主墳は5世紀後半以降は途絶えてしまう。兵庫県但馬の円山川上流域にも池田古墳を中心に5世紀の大規模な前方後円墳があったが、それ以前も以後も盟主墳はない。

畿内では、5世紀中頃に太田茶白山古墳を造営した大阪三島の安威川系譜、恵解山古墳を築いた乙訓の長岡系譜、久津川古墳を生み出した南山城の久世系譜など、淀川水系の有力首長系譜がこの五世紀に盟主墳を築き、新たに全盛期を迎える。しかし5世紀後半には、これらの系譜はすべて断絶する。

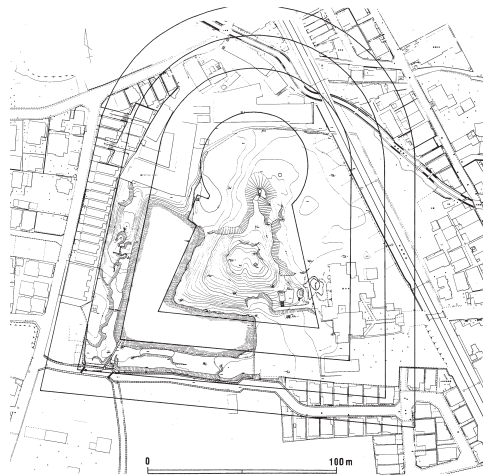
このように5世紀後半に全国で多くの有力首長系譜が断絶して空白となる。この空白の5世紀後半に、別の系譜が巨大な前方後円墳を築き始める。熊本県菊池川流域の系譜はその一つで、ここには有名な江田船山古墳がある。埼玉の稲荷山古墳の系譜も空白の5世紀後半に盟主墳を築く。また群馬県の保渡田古墳群の系譜もこの5世紀後半に盟主墳を築いている。この保渡田古墳群の近くには有名な三ツ寺遺跡があるが、三ツ寺遺跡は深さ3mもの灌漑用水路や巨大な居館、広大な開拓で首長権の驚異的な力を見せつけている。

5世紀後半のこの第二の政治変動は何によって引き起こされたのだろうか。5世紀後半に活躍した雄略大王の登場と関係があると、私は考えている。この考えは文献史学の研究とも合致する。先に述べた熊本の江田船山古墳や埼玉の稲荷山古墳は、それまでの系譜が無いのに5世紀後半に突然出現した古墳だが、いずれの古墳からも雄略大王に関する文字を刻んだ鉄刀・鉄剣が出土している。銘の内容から、古墳の被葬者は雄略大王に仕えた軍や文書関係の官人と考えられる。

雄略大王は、伝統的政治体制を支えた有力首長同志のそれまでの横のネットワークを破壊して、官人を使って権力を中央に集中する革新的体制を敷き、国家形成を一步進めた。そのため雄略政権を支えた首長はそれまでの伝統勢力でない者も多く、官人に任命された江田船山古墳や稲荷山古墳の被葬者こそ雄略を支えた新しい首長であった。

つまり、5世紀後半の第二の変動では、伝統的政治体制と中央権力を強化しようとする雄略大王の政策が衝突し、「記紀」に記録されたように、強大な吉備や毛野など各地の強い伝統的な勢力の反乱や首長権をめぐる争いが生じ、有力首長の交代が生じ、盟主墳の移動が起きたと私は考えている。

つぎに6世紀初頭に起きた第三の変動を見よう。第三の変動にも、多くの系譜で盟主墳の断絶と開始があった。驚いた事に、6世紀前半に始まった盟主墳の中には、第二の変動で断絶した系譜の復活したものが



第1図 宇治市二子塚古墳(『宇治市文化財調査報告』第3冊 宇治市教育委員会 1992)



第2図 愛知県断夫山古墳(『前方後円墳集成』
中部編 山川出版社 1992)

非常に多く含まれている。

5世紀後半に断絶した淀川水系の復活はその典型的なケースである。淀川水系では、河内の王家と親密な関係にあった首長の盟主墳が5世紀前半に多く築かれたが、それらの系譜は雄略の活躍期の5世紀後半には断絶した。ところが断絶した淀川水系の系譜は6世紀前半に再び復活し、復活した中の一つ大阪三島の盟主墳である今城塚は、継体大王陵と考えられている。同じく淀川水系の宇治市の二子塚古墳は今城塚古墳の三分二の相似形で、今城塚と深い関係があると考えなければならない。再興した淀川水系に継体大王の墓があることは何を意味するだろうか。それは6世紀前半の政治変動が、継体大王の登場と密接な関係を持つ

ことを示唆する。やはり復活した愛知県尾張の断夫山古墳をはじめ、各地に巨大な前方後円墳が6世紀中頃に築かれたが、継体大王を支えた有力首長の墓だろう。この他にも京都市嵯峨野や長野県天竜川流域や大阪府枚方の樟葉では、6世紀になって盟主墳が出現する。これらの地域ではそれまで開発が遅れていたが、6世紀に入って渡来系集団が移住し新たに畑作の経営が始まった。住人の使った土器に朝鮮系のものが多く含まれるのでそうと分かるが、長野県の天竜川流域や樟葉では、畑の外に牧場で営んで馬が飼われていた。出土した馬具から、戦闘用の馬を育てたことがわかる。牧はもともと日本にはなく朝鮮半島のものだから、これからも渡来系住民の移住とわかる。文化的に高い渡来系集団が政治的に力を持ち、継体を支える勢力になり盟主墳を築いたのであろう。

3. 東アジアの影響

これらの政治的変動に、東アジアの情勢がどのように影響を与えたのか見てゆこう。

5世紀の東アジアは動乱の時代だった。4世紀の初めに中国の西晋は匈奴の侵攻によって滅び、中国は小国に分裂し五胡十六国時代に入った。中国の抑圧から解放され、朝鮮半島の各地で国家形成の動きが活発化した。朝鮮半島南端の伽耶は日本と深く交流した地域だが、加耶でも5世紀に国家形成へと急速な動きが始まる。朝鮮半島北端の高句麗は、力

を増して314年、中国の支配下にあった帯方郡を滅ぼし、朝鮮半島の政治情勢は極めて不安定となる。372年、百済の王から七支刀が倭王に贈られた。百済は倭との友好関係によって、自らの政治的安定を図ったのであろう。この動向に倭も大きな影響を受け、朝鮮半島の覇権を握ろうとする。高句麗の好太王を称えた碑文は、391年に倭が百済・新羅に侵攻し、高句麗の国境まで来襲したので撃退したと伝える。倭と朝鮮半島との交流は活発になり、4世紀末に倭が高句麗に撃退された直後から倭の五王は、朝鮮半島南部における倭の政治的覇権を中国王朝に認めさせようと、使いを中国に派遣する。では、朝鮮半島との交流の具体的な目的はどこにあったのだろうか。それは鉄資源と先進文物の確保であった。

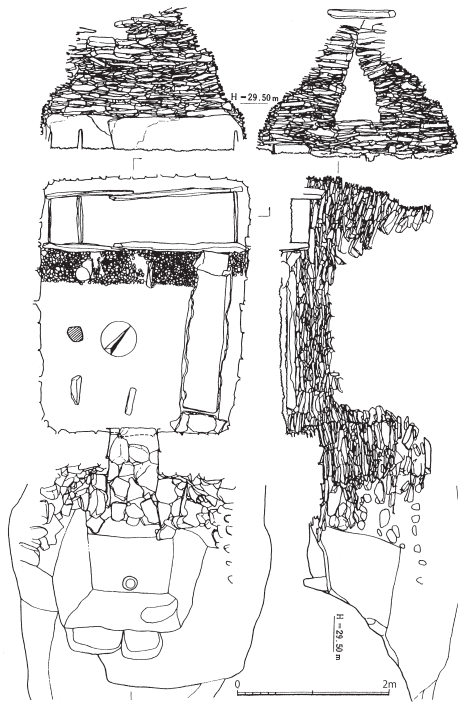
日本と交流した韓国南部の伽耶では、4世紀後半から5世紀に墳墓や集落で、日本製の土師器や青銅器、ときに滑石製の祭器が発見される。全羅北道竹幕洞遺跡では、日本製の滑石製の祭器が多数発見された。この遺跡は、玄界灘の安全航海を祈願した祭祀遺跡の福岡県沖ノ島遺跡と似た性格だと考えてよく、竹幕洞遺跡で祭祀に関わったのは倭人か、あるいは倭人と親しい関係にある在地の人だろう。この遺跡は立地から見て、倭から百済や中国に使節を派遣する際のルート上の中継地に当たる。このような日本との深い関連を示す大陸の遺跡があることからみて、東アジアの権力争いは、国家形成期の日本の政局にたちまち大きな影響を与えただろう。

福永伸哉は、日本製の筒形銅器と巴形銅器が朝鮮半島南部の首長墓からも4世紀半ば以降に出土することに着眼し、中央政権の交流先が4世紀半ばに中国から朝鮮に移ったという推定にもう一つの論拠を^(注3)加えた。

一方日本列島においても同じ時期に、伽耶産の陶質土器や、鉄鋌の出土量が急増しており、この時期に倭と伽耶の交流が頻繁になったことが分かる。3世紀の朝鮮半島について記した「三国志」の「魏志東夷伝」弁辰条は、弁辰で鉄がとれ、倭人も採りに来ると記述する。5世紀の日本の古墳から出土する鉄鋌は、伽耶のものと形態が同じで、科学的分析からも朝鮮半島産のものと判明している。倭人にとって、伽耶は重要な鉄資源の補給地であった。また百済も伽耶も、陶質土器や金属工芸で先進的な技術をもっていた。

5世紀に、東アジアの諸国へ進出した倭の五王の活発な外交活動や軍事行動の目的は、これらの鉄資源と先進技術の確保であった。鉄は日本の中央政権がその輸入を独占し、有力首長を統括するのに不可欠であったし、先進技術は中央政権の先進性や威厳を示すのに不可欠であった。一方百済や伽耶は、高句麗南下の圧力に対抗するために倭との友好関係が不可欠であった。両方の利害が一致する限りにおいて倭は朝鮮半島で活動できた。

この時期に大きな前方後円墳が瀬戸内海沿岸や日本海沿岸に築造され始める。九州北部の沿岸では福岡県^(注4)鋤崎古墳、瀬戸内海沿岸では神戸市五色塚古墳、岡山県金蔵山古墳、日



第3図 福岡県鋤崎古墳(柳沢一夫『鋤崎古墳』
福岡市埋蔵文化財調査報告書112 1984)

本海沿岸では福井県六呂瀬山古墳、京都府神明山古墳、鳥取県北山古墳がこの時期の代表的な大型古墳だが、これらの古墳は朝鮮半島との交流に適した港を持つ地域にあり、朝鮮半島へ人や物資を補給するための水上交通の重要な中継地であった。岡山県金蔵山古墳からは朝鮮製の斧の鋳型が出土した。

さらにこの時期には、三角板革綴短甲と呼ばれる朝鮮半島からの先進的鎧が各地の首長の中に急速に普及した。兵庫県加古川市行者塚古墳^(注5)では伽耶産の馬具や鉄鋌が、岐阜県遊塚古墳では伽耶の陶質土器が副葬され、朝鮮半島と密接な関係をもった首長がこの時期に登場したことを示す。これらから推定すると、4世紀後葉から5世紀初頭にかけて沿岸部に大きな前方後円墳を築

いた首長たちは、この時期の朝鮮半島の政治的緊張に備えて倭政権の中樞が同盟を結んだ有力な地方首長、あるいは畿内中樞からの派遣者の可能性がある。

日本の大王の巨大古墳の立地が移動し、首長系譜が全国的に移動したのは、交易先が中国から朝鮮半島に代わった、まさにこの時期であった。中国を主な交流先とした奈良盆地東南部に拠点を置く政権中樞と、これを支える地方の有力首長の同盟が弱体化し、朝鮮半島との太いパイプを持つ河内に拠点を置く政権中樞と、それを支える地方有力首長の同盟が、4世紀末から5世紀初めに政治的イニシアティブを奪ったのだと考えることができる。

次に5世紀後半の政変への東アジアの影響を見よう。

西暦478年、倭国王の武(日本書紀にある雄略大王と推定される)が中国の宋に使いを派遣し上表文を出したと、中国の正史「宋書倭人伝」は伝える。この申し立ての主旨は「自分の父祖は代々、日本列島と朝鮮半島の征服戦争を敢行し、二一六もの国を支配下においた。自分を倭と朝鮮半島の大部分を治める大將軍に任じて欲しい。」と称号を要求し、宋の順帝は、武に「使持節都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六国諸軍事、安東大將軍、倭国王」の称号を与えた。ここにあがっている六国を支配する大將軍に任じるというものである。倭の五王はどの王も、宋に使いを送るが、倭の五王のうち、珍や済が自らの

將軍号だけでなく、(珍は)「倭隋ら十三人に」將軍号を、また(済は)「二十三人に軍郡」を同時に要求しているのに対し、雄略は自分一人だけの称号を要求している。雄略以外の倭王が、称号を受けた有力首長たちとの結束を支えとして、東アジアの政治的動乱期を乗り切ろうとしたのに対し、雄略は自分が権力を一手に握り、地方の首長を配下として使い動乱を乗り切ろうとしたのであろう。

さらに雄略は中央権力を高めようと官人制を取入れた。

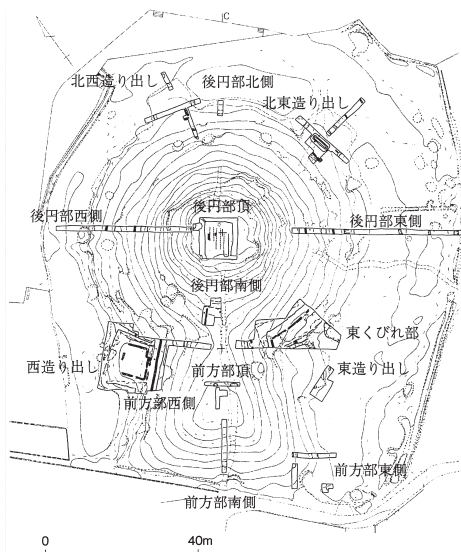
1978年、埼玉県稲荷山古墳出土の鉄剣に115文字の銘文のあることが公表された。銘文にある干支表記の「辛亥年」を471年と解釈する説が有力で、銘文には、剣を作らせたオワケノオミが祖先から八代にわたって「杖刀人首」として大王に仕えた来歴が記されている。杖刀人とは、のちの舎人のような親衛軍のメンバーと考えられている。稲荷山古墳の被葬者自身がオワケノオミなのか、オワケノオミに仕えた杖刀人の一人であるか、解釈は分かれるが、雄略大王が活躍した5世紀の後半に、中央政権の軍事組織が芽生えたことを窺わせる。

熊本県江田船山古墳から出土した大刀の銘文も雄略大王の時代のものと判定された。この大刀に記された、ムリテという名の「典曹人」は文官と考えられている。とすれば雄略大王の政権は文官と武官の制度をもっていたことになる。

杖刀人にせよ、典曹人にせよ、「人」が



第4図 京都府神明山古墳
(『京丹後市の考古資料』京丹後市 2010)



第5図 兵庫県行者塚古墳(『行者塚古墳発掘調査概報』加古川市文化財調査報告書15 1997)

いている。かつて直木孝次郎は、「記紀」にある「文人」「倉人」「酒人」などを初期の官人と考え、この官人制を「人制」と呼んだ。この制度が遅くとも6世紀には存在したと直木は主張したが^(注6)、稲荷山古墳の鉄剣銘文の発見によって、さらにそれが遅くとも5世紀後半にまでさかのぼることが証明された。

稲荷山古墳の鉄剣銘文では、オワケノオミは、杖刀人首が八代続いたと主張している。それが事実かどうか不明だが、人制は5世紀の後半になって初めてできた制度ではないだろう。また、倭の五王の使節は5世紀の初頭から頻繁に中国に派遣されており、外交文書の作成管理の仕事をはじめ、様々な職掌を担う官人制は不可欠であり、この制度は5世紀後半以前からあったものが、5世紀後半に大きく進展したと考えなければならぬだろう。

租税や兵糧を納める5世紀初頭の巨大な倉庫群が見つかった。巨大倉庫が大王権力や有力首長の祭り事を行う地にあることから、この倉は大王個人の倉ではなく、祭り事に組み込まれた倉であり、倉の管理にあたる専門家や官人の存在なしには、すでに運営できなかったであろう。

稲荷山古墳や江田船山古墳の刀剣銘文の解釈や、古墳における武器や武具のありかたから、5世紀には、軍事制、官人制ともに整備されつつあったことが分かる。雄略大王が取入れた官人制は成熟国家にとって必ず必要な組織だが、雄略はその制度をどこから学んだのだろうか。雄略大王の官人を埋葬したと推定される江田船山古墳には、百済系の装身具が副葬されており、百済で最強の力をほこった武寧王の木棺は高野槨で作られた。高野槨は中国にも朝鮮にも自生しないから、日本から木材が渡ったものと考えられる。雄略大王はこのように交流の深かった百済から官人制を学んだと考えるのが妥当だろう。

雄略大王が中央集権的な体制を急速に整えようとした事は「記紀」にある雄略大王関係の記事からも分かる。古くからの強大な地方権力である吉備が雄略大王に反抗し鎮圧された、5世紀後半の「吉備の反乱」を「記紀」は伝える。岡山に独立した吉備国家があり、大和政権と対立する巨大勢力であったとする説があるが、この解釈は5世紀後半の「吉備の反乱」を生んだ対抗関係が5世紀前半まで遡るとみる考えだ。しかし5世紀中頃の履中陵と造山古墳、作山古墳は同じ設計で作られており、吉備の地域権力は5世紀半ばまでは大和や河内の倭政権中枢と友好関係にあったと考えられる。造山古墳や作山古墳の被葬者は、先に述べた倭王の珍や済が倭隋らと共に將軍号を要求した有力首長の一人の可能性もある。

新納泉は、雄略朝期の変革の第一のねらいを、瀬戸内系ブロックに打撃をあたえることによって、日本海・東海系ブロックや、東国系ブロックとの力の均衡を図ることであった、と捉えている。^(注7)もしそうであれば雄略大王は、特に強力な地方権力を潰して、中央政権が

自由に扱える均質な地方権力を作ろうとしたのであろう。

強大な地方権力吉備氏の反乱は、連合体制を解体し権力を政権中枢に集中しようとする雄略大王への抵抗と考えることができる。

さてこの5世紀後半に断絶した首長系譜の多くは、5世紀前半には河内を拠点とする政権中枢と親密な関係にあった。これら断絶した首長系譜の多くは、伝応神陵古墳や伝仁徳陵古墳の墳形と同一設計の相似的な古墳を築き、鉄器の多量埋納や埴輪の製作技法においても5世紀前半の河内の巨大前方後円墳と多くの要素を共有した。まさに系譜の主は、將軍の名を下賜された「倭隋ら十三人」や「軍郡二十三人」と宋書が伝える、倭の五王時代前半期の有力首長連合体制を支えた首長達だろう。

しかし5世紀の後半雄略大王に反抗したこれらの首長系譜は没落し、地方権力は交代する。これが第二の政治変動だと私は考える。

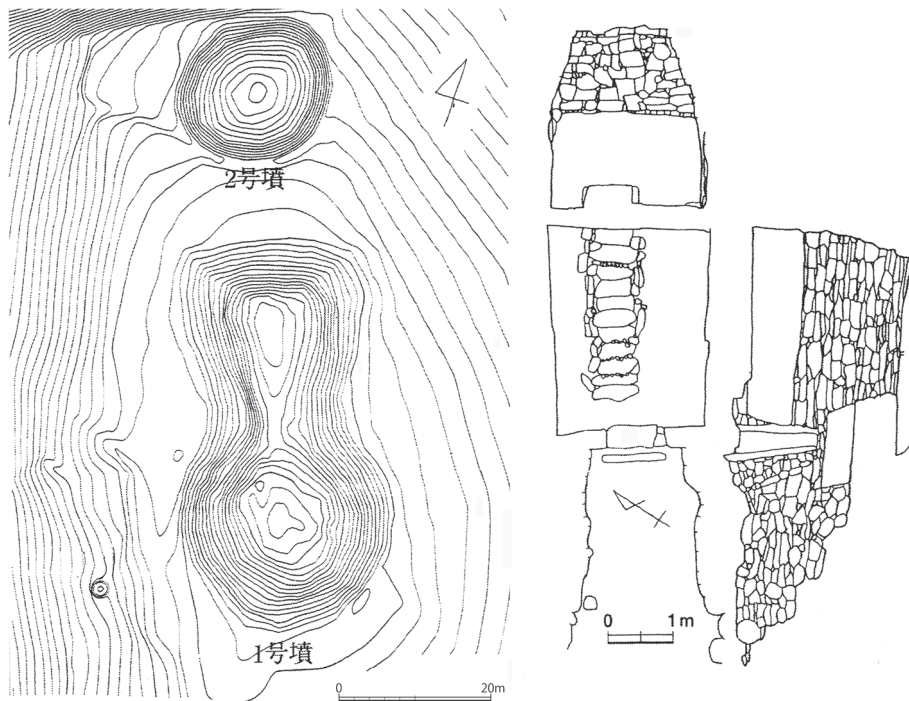
雄略の時代は、前方後円墳の分布が最も拡大した時期である。岩手県角塚古墳と鹿児島県唐仁古墳群と塚崎古墳群が分布域の北端と南端とにあたる。このうち、角塚古墳は奈良時代に辺境支配の城柵がおかれた胆沢城に近い場所であることは興味深い。すでに古墳時代から中央の権力がこの地にまで及んでいたのである。

さらに注目されるのは、大阪府陶邑窯跡群で生産された須恵器が、前方後円墳分布域の北端と南端とにまで運ばれていることだ。須恵器は4世紀末に朝鮮半島から日本に伝わった上質の器で、高い焼成温度が必要で、特別の専門集団にしか作成できないが、この須恵器が古墳のみならず、集落遺跡でも出土する。当時の辺境ともいべき地にまで前方後円墳が築かれただけでなく、須恵器という日常容器の流通圏の先端がここまで届いている事は、中央権力の及んだ地には、文化的経済的な影響力が生活の隅々にまでゆきわたっていた事を窺わせる。同じ流通網に乗って鉄素材や鉄器などの必需品もまた運ばれたことは間違いない。

中国や朝鮮半島などの東アジアの動向を知り、日本の雄略大王、継体大王の韓国への進出を知ると、日本の国家形成に東アジアの動向が大きく影響したことが理解できる。

次に第三の変動、そしてその後続く変化と東アジアの関係を見よう。

朝鮮半島南西の端に流れる栄山江流域に13基の前方後円墳がある。前方後円墳の特異な墳形は日本で生まれ発達したものだから、この前方後円墳の存在そのものが、朝鮮半島と日本の深い交流を示している。古墳には倭の製作技法に似た円筒埴輪をもつものまである。出土する陶質土器はその地で製作された。これらのことから、この13基の前方後円墳は栄山江流域に移住した倭人かその後裔、あるいは倭人と親密な交流をした在地の首長層の墓であろう。韓国の朴天秀は、この13基の古墳が6世紀前半に築かれており、百済と日本の



第6図 韓国咸平郡礼德里新徳古墳・1号墳石室
(朴天秀「榮山江流域における前方後円墳が提起する諸問題」(『歴史と地理』第577号)2004)

両方の影響を強く受けた墓であると説明している。^(注8)

雄略大王は官人制と軍事制の力を基礎にして有力首長連合体制を解体し、日本列島の南北端と朝鮮半島に対する覇権を更に拡大した。しかし急激な集権化であったために、その反動で雄略大王亡きあとの6世紀前半に古墳の系譜は揺り戻しを受け、5世紀後半断絶した系譜が多く復活する。とはいえ中央集権の流れをとめる事はできなかった。権力を高めるには継体大王は地方権力を組織して朝鮮半島に打って出なければならなかった。朝鮮半島への出軍中に磐井の乱は起きた。

「日本書紀」は継体大王の代に起きた磐井の乱について記している。「527年6月朝鮮半島に出兵しようとした中央軍、近江毛野が率いる六万の兵を筑紫造磐井が阻んだ。翌528年11月中央軍が派遣され、磐井は激しい戦いの末鎮圧され殺された。同年12月磐井の息子葛子は連座を逃れるため糟屋屯倉を差し出した。529年3月中央政権は、再び近江毛野を任那に派遣した。」というものだ。朝鮮半島への進出と交流が、倭の地位を高め、朝鮮半島の13基の前方後円墳を築かせるほどの影響を与えたと見てよい。

磐井の息子葛子は罪の連座を逃れた。これは中央政権が地方権力によって支えられてい

る事の証であろう。継体大王は葛子を許さざるを得なかった。

畿内では6世紀半ばから前方後円墳は急激に減少し、前方後円墳を支えた思想は終焉に向かい、新しく仏教の思想が大王の墓に現れて墓は方形に変わる。この新しい思想は中国そして朝鮮半島からやってきた。

4. 日本の初期国家の特質

古代国家の生まれる直前の社会は、全ての国が通過した社会である。国家に限りなく近づいているが、完全な国家には至っていないこの社会に一定の意味を与えようという考えがヨーロッパから生まれ、この社会は初期国家と名付けられた。^(注9)

日本の初期国家は古墳時代である。日本の初期国家の特異性は、一人の王が全権を握るという形をとらず、地方の権力者の連合体制の上に大王が支えられていた事である。また地方権力者の墓は王と同じ墓形を採るのが普通であるが、日本では大王の墓形である前方後円墳を築く首長が力を持つてはいたが、他の墓制を持つ首長も首長連合体の中で一定の地位を占め力を発揮した。この特異な体制を私は前方後円墳体制と名付けた。^(注10)

(つで・ひろし＝当調査研究センター理事・大阪大学名誉教授)

注1 都出比呂志「古墳時代首長系譜の継続と断絶」(『待兼山論叢』22号)1997

注2 都出比呂志「首長系譜変動パターン論序説」(『古墳時代首長系譜変動パターンの比較研究』)1999

注3 福永伸哉『古墳時代政治史の考古学的研究—国際的契機に着目して—』(平成7～9年度研究費補助金(基礎研究c)研究成果報告書)1998

注4 柳沢一夫『鋤崎古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書112 1984

注5 『行者塚古墳発掘調査概報』(加古川市文化財調査報告書15 加古川市教育委員会)1997

注6 直木孝次郎『日本古代国家の構造』青木書店 1958

注7 新納泉「古墳時代の社会統合」(鈴木靖民『倭国と東アジア』吉川弘文館)2002

注8 朴天秀「栄山江流域における前方後円墳が提起する諸問題」(『歴史と地理』第577号)2004
朴天秀『加耶と倭韓半島と日本列島の考古学-』講談社選書メチエ 2007

注9 Classen, H and Skalic, P., The Early State, Mouton. 1978

注10 都出比呂志『前方後円墳と社会』塙書房 2005

